

ひまわりからの メッセージ

142号
2023.9.11
NPOひまわりの花内
西濃圏域
発達障がい支援センター
発行人:中野たみ子

夏が過ぎ

そして一日一日と

季節は移^{とき}りゆく



忙しかった夏休みが終わり、二学期が始まりました。

私は、教育相談や検査の依頼などで毎年、夏は忙しく過
ごしていますが、子どもたちは、どんな毎日を通^とじたのでし
う。行きしぶりや欠席の子たちも多くなっているのかもしれない。
子どもたちの内面のつらさや葛藤をどうしていったら
良いのかと思つたのですが、いたずらに日々を重ねていつて
しまっている様な焦りもあります。

日々忙しくあちこちの学校や園をたび回っていますと
時々「先生はストレスはないのですか。」と問われることが
あります。「昔は旅もしましたけれど……」と答えつつ
そういえば、滋賀の徳源院にもしばらく行ってないし
関ヶ原も歩いていないなあと思ひます。「砂漠が好き

だ」と書いておられました。外国へは行かれるのですか。」
とたずねられて、「いや、もう体力がもちません。」と言いつ
つ、何となくほろりほろり何とも言えない砂漠のにおい
懐しく思い出したりします。私の祖先はきっと砂漠の民
だったに違いないと昔は思っていました。

そんな私に、今日はモロッコの大地震のニュースが飛
びこんできました。亡くなった人も多く、大変な被害だ
ということですが、そういえばモロッコに旅したのは何年前に
なるでしょうか。砂漠から上る朝日を観るといつツア
ーでした。早朝、まだまっくらな夜道を車に揺られて行
たことを思い出します。被害がひどいと伝えられたマラケ
シの旧市街地は世界遺産に登録されていて、私たち
の宿泊地でした。市内のモスクの塔も崩れ、付近はがれ
きの山になっていくとのこと。旅で出会ったかの地の人たちは
大変な思いをしておられることでしょう。亡くなった方もい
らっしゃるに違いないと思います。

わが家では、今、鈴虫が次々と鳴いています。平和で静
かな夏の夜、けれどもいつ何時、自然の脅威が襲ってこ
ないとも限りません。酷暑の中を鳴きつづけてくれた鈴虫
たちの音も秋の深まりとともに消えてしまうことでは
う。一日一日限りある時間が過ぎていきます。でも、明日
があると信じて胸をはって生きていきたいですね。

感覚と脳

- 我々は絶えず感覚を通して外界の刺激を受け入れている。
- ↓
- 感覚が入力した情報が脳に送られる。
- ↓
- その結果、我々は考えたり、話したり、行動したりして環境に適応していく。(適応行動)

※ 感覚情報がうまく入ってこないと環境にうまく適応できず、認知・言語・行動・運動面など様々な問題が現れる。

1

感覚統合療法理論

1960年～70年代

アメリカの作業療法士 エアーズ (Ayres, AJ)

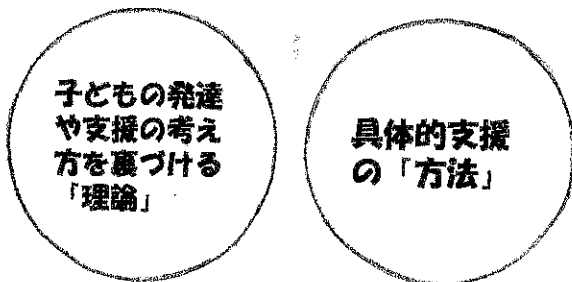
学習障害児に見られる行動上の問題、社会的技能の低下の原因を明らかにする中で、感覚統合療法ができあがってきた。

<感覚統合の基本的な考え方>

子どもの感覚の受け入れ方や統合能力をふまえた上で必要な感覚刺激を使い、統合できるように脳の活性・組織化を促し、適応行動を導き出していく。

2

感覚統合が持つ2つの側面



H21年1月号感覚統合会報より 土田玲子会長

4

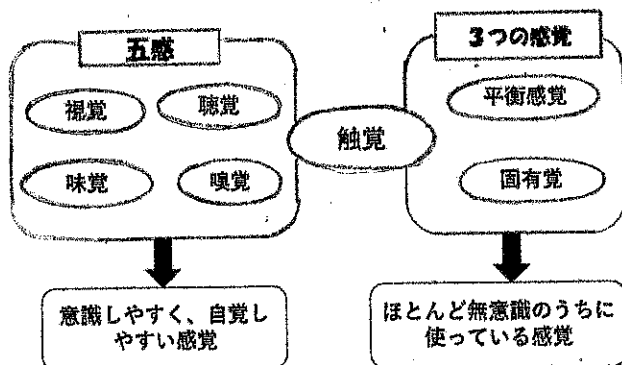
感覚統合理論の側面

感覚の過敏さ不器用さによる子どもが抱える困りは「見えにくい」ゆえに「理解されにくい」。

- 一つの理解の方策を示すことで、子どもの世界を内面から共感的に、理論的な見通しを持って寄り添おうとする。
- 人の多様性と繋がりあいの価値観を発信すべきであるとする。

3

感覚統合で重視する3つの感覚



6

感覚統合理論の特徴

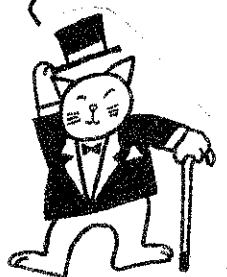
- 個々の能力低下を直接治療の対象とせず、原因としての学習の過程に目を向けた。
- 発達を各感覚の統合の過程とみなし、障害をその統合の不全として理解するところにある。

※エアーズは学習障害の治療を中心に、自閉症児の一部にこの理論を適用したに過ぎないが、学校教育や作業療法の現場では重症児、知的障害児などの多彩な発達障害に対して適用されつつある。

5

木村順先生の

研修会を前にして



九月三十日と十月一日の二日間、東京から作業療法士でドリムタイムを主宰されている木村先生をお迎えしてお話を聞くことにしました。先生が大切に考えられる基礎感覚(触覚、平衡感覚、固有覚)について学び、子ども達が何故困っているのか、何故感覚統合が必要なのか、学ぶことができると良いなあと思っております。

発達支援の実践法として

- ・多様な感覚体験をすること
- ・意欲や興味を育て生かすこと
- ・成就感や達成感、成功体験を味わうこと
- ・子どもたちと私たちが互いに関わり合い、触れあうことで、人に対する信頼感や有能感、コミュニケーション技能や社会的な力の発達を育む
- ・単に物理的な危険から遠ざけるのではなく、その危険にうまく対応できる力や環境に挑む力を育てていく

8

体の育ちの重要性

現代文明は、子どもの読み、書き、計算、ことばなどの力に価値を置きすぎる傾向を産み、さらに便利さ、快適さの追求によって人の体を「退化」させる方向に進んでいます。そして子どもたちは体をしっかり使って遊びこむ経験を奪われつつあります。そこで私達は、「からだの育ち」が子どもの全人的発達の大きな基盤になることを発信することで、現代の子育て感や社会環境の改革に貢献しなければならないと考えます。

(日本感覚統合学会 会長 土田玲子)

7

感覚系の統合過程

<第1段階>

触覚系内部（防衛的機能→弁別的機能）、固有感覚系、前庭感覚系がそれぞれ統合
固有感覚系と前庭感覚系の統合

<第2段階>

前庭感覚系、触覚、固有感覚系の3者が統合

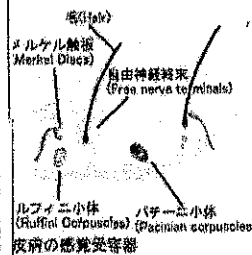
<第3段階>

3者と聴覚、視覚との統合

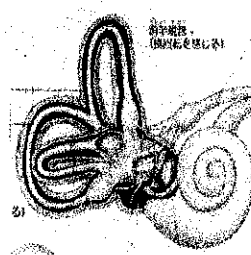
10

3つの感覚

・触覚：肌



平衡感覚：内耳



固有覚：筋肉・間接・腱内



9

触覚の低反応（鈍さ）と過敏

鈍さ：触られても気づかない。人との距離が保てない。
自己刺激行動
(指しゃぶり、鉛筆や爪を噛む、髪を抜くなど)
痛みや寒暖、ぬれた感覚など皮膚感覚が鈍い場合も触覚の低反応として痛覚や温度覚の鈍さが考えられる。

過敏：列に並べない。糊が触れない。偏食
ドッチボールできない。
服へのこだわり

12

触覚（しよっかく）の主な働き

- ①情緒を安定する働き 母の抱っこ・ふわふわ毛布など
- ②防衛する働き 熱いやかん・虫よけ
- ③識別する働き
ポケットの中の切符と5円玉を識別
手の器用さにつながる
- ④身体の地図を把握する働き
皮膚は自分の体と外界の境界
自分の体の輪郭を感じる

11

前庭-脊髄系の低反応と過敏

鈍さ：過剰に平衡感覚の刺激を求める
落ちつきなく動き回る
飛び跳ねる くるくる回る
高いところに登る
物をよく落とす
スタート・停止が出来ない。

過敏：重力に対して不安
体を動かすとすぐに疲れる
新しい姿勢を取ることに恐怖

遊具：ハンモック、スクーターボード、
ホーススイング、プラットホームスイング等

14

前庭覚（ぜんていかく）の主な働き

- ① 覚醒を調整するはたらき
- ② 重力に抗して姿勢を保つはたらき
(抗重力姿勢)
- ③ バランスをとるはたらき
- ④ 眼球運動をサポートするはたらき
- ⑤ 身体の機能を把握するはたらき

13

固有覚（固有受容覚）の主な働き

- ① 力を加減する働き
- ② 運動をコントロールする働き
- ③ 重力に抗して姿勢を保つ働き（抗重力姿勢）
- ④ バランスを取る働き
- ⑤ 情緒を安定する働き
- ⑥ 身体の地図を把握する働き（ボディイメージ）
- ⑦ 身体の機能を把握する働き

15

固有覚の弱さ

運動の苦手さ

重い物を持ってない

階段の上り下りに慎重になる

洋服がなかなか着られない

遊具：滑り台、はしご、平均台、ジャングルジム
脚立、ロープ、トンネル、スロープ等

16

決めつけることの危うさ

～ある講演会に出席して～

先月、行動障害に関する講演会がありました。どんなことが話されるのだろう、どんな人たちが聴講されるのだろうかと
思いつつ出席しました。演者は県外の施設の施設長さん
で、四十代くらいの方だったように思いました。
その講話の中で私が感じたのは、残念ながら障害をもつ



方々に対する差別感でした。何故そんなことを感じたのか、それは、その方のことばの端端から「上から目線」を感じたからだったかと思えます。例をあげてみます。

「自閉症は……」と一括りにされるけれど……？

まず、今は「自閉症」というより「自閉スペクトラム症」と捉えられています。昔は、自閉症、高機能自閉症、アスペルガー症候群などと呼ばれていました。しかし、では、自閉症とそうではないと考えられる人との明確な境界線があるのかというと、そうではないのではないかと、連続体として考えるべきではないかと言われています。でもその方は一貫して

「自閉症は……」でも僕らは……」

「自閉症は……」でも一般の人たちは……」

講演の中で度々比較するものとして出されてきた前述のようなことは果たして正しいのでしょうか。これらのごときはの中には、明らかに自分とは違う自閉症の人が存在し、そこに自らは高みに立って上から見下している様な居心地の悪さを私は感じてしまいました。人は一人として同じ人間はいないので、私たちが向き合っているAさんは、「自閉症のAさん」ではなく、「Aさんがたまたま自閉スペクトラム症の特性の見られる方だった」ということではないのでしょうか。私は

この捉え方の違いは大きいと思うのですが、皆さんはどう思われるでしょうか。

「自閉症は人の気持ちから分らない……」

濱者の方は自閉症の特性として「人の気持ちがわかってない」「視覚に強く聴覚は苦手」と話されました。本当にそうでしょうか？

私は数年前に学校の廊下で転んで圧迫骨折をし、起き上がれなかったことがあります。情緒学級の近くでした。すると子どもたちが「大丈夫？」と心配してくれました。ある子は何か白い包みのような物を持って（給食エフワロンの袋か何かでした）「これ、したり良いかも……」と差し出してくれました。私の姿を見て、痛みを想像し、少しでも楽にしてあげたいと思ってくれたのではなかったでしょうか。

あるお母さんはこんな話をしてくれました。家族で食事に出かけた時のこと、予定していたお店に行くと満席で入れず他の店に行くことになりました。父親が「ではB店に行こう」と言うと、特性のあるお兄ちゃんは「B店には妹の好きな物がなにか別の店にしようよ」と言ったとのことでした。人を思いやる気持ちの例をあげようと思えば、いくつでも人は話すことはできます。むしろ子どもの心さみみにじっくりも何と

も思わない事例も話すことができます。

ある情緒学級でのできごとです。担任の先生は「授業中におしゃべりしてはいけません」と言われました。Aさんはそれを守っていましたがBさんはしゃべります。でもAさんはBさんを注意したとしても先生から「しゃべってはいけない」と言われているので口で注意することはできません。その点、律義なのです。でも注意しなくちゃいけないと思ったAさんは、Bさんを叩いて止めさせようと思いました。それを見とめた担任の先生は、Aさんをひどく叱責しました。当然Aさんは納得がいかず机をひっくり返し、水槽をひっくり返して怒りました。担任は他の先生に助けを求めました。集ってきた先生は口々に「大丈夫？」と声をかけましたが、彼の真意は誰にも分かるとはもうえませんでした。担任の先生も自分の発言が原因だったことも分らず、Aさんは理由もなくBさんを叩き、それを注意した結果であると同僚に伝えたのでした。その後、長い年月もAさんは「大丈夫」ということはフラッシュバックして苦しむことになったのです。私から言わせてもらえば、担任の先生こそ、Aさんの気持ちがわからなかったのではないのかと思えるのです。Aさんが行動を起こす前にBさんに注意を促すことはできなかったのでしょうか。

「自閉症の人は人の気持ちが分らない。けれども少くも自分には健全者である人の気持ちがわかっている」と思っているのは本人だけで、誰もが他人の気持ちを分かるのは難しいのでは

ないでしょうか。

「自閉症の人は視覚優位です」という発言にも私は納得できませんでした。何故「自閉症の人は……」と一くりにするのでしょうか。どうして、そういうきめつけが罷り通るのでしょうか。

昔、障害を考える時、医療モデルといって医師の診断が優先され、その障害を訓練することで治していこうという考え方が主流でした。しかし、今、そういう捉え方はしていません。むしろ、生き難さをもつ人それぞれの困りにつながっている社会的障壁と言われるものを皆で取り除いていく努力をしていこうと考えています。例え医師が自閉スペクトラム症という診断をされても、同じ診断名がついた方が十名いらっしゃったり、その十名の方は、お一人お一人が異なる人格をもたれている人です。すまね、それを一くりにして良いわけはありません。

この講演を聞きながら私は津久井山ゆり園の事件を思い出していました。演者の方の話の中に関わっている人たちに対する優しさを人間愛といえるようなあたたかさを感ずることができなかつたからです。この施設長さんのもので、どんな職員が育てていくのだろうか……。そんな怖さも感じたのです。

私と一緒にその場にいらした人達は、どのように感じられたのでしょうか。支援のテクニクとしては「そういう方法もありますね」ということもありましたが、出席者の人達の中には、「そうか、自閉症の人には、そういうやり方をすれば良

いのだな」と方法論を学ばれた人もあったでしょう。でも、私は演者に「自閉症の方の中にはこんなことで困っている人もおられるのですよ」というような話し方をしていた。良かったと思いました。

差別という意識が本人の悪意の意識もなく、いつの間にか人の心にじわじわと広がっていくような怖さを感じるのには、私だけではないと思います。かく言う私自身の中にも常に危うさがあります。

子どもたちを育てる立場にある私たちは、自分の生き方を問われているのだと思っております。あなたは、どう生きるのですか。自分に恥じない生き方をしていますか。誰かに問われたり、私は「ノー」と言うしかないのだと思ったり。人権、差別という問題は本当に根深く、人が生きようとする限り、永遠の課題なのでしょう。深く考えさせられた講演会でした。

お知らせ

- 10/4 ピアサポート
- 10/16 センター親の会
- 10/28 家族会



お願い

子どもたちの生活を見直しして下さい。子どもにとって睡眠は脳の発達にとって大切なのです。九時間睡眠を保障してあげて下さいね。